

飽かずして別れし人の住む里は

左波子の見ゆる山の彼方か

陸奥飯坂にて、西行法師



陸奥の旅にしあれば椎の葉に

包みて思ふ汝と草枕

令和七年十月六日

大中臣正比呂

謀反人として中大兄皇子のもとに、尋問を受けるために移送された有馬ありまのむほんにんみこ

皇子が、旅の途中で詠んだ歌が万葉集に残っている。

家にあれば筥けに盛る飯いひを草枕

旅にしあれば椎しいの葉に盛る

悲しい歌ではあるが、残してきた妻を思うことによって、自身の不安を抑えている心情が伝わってくる。

「家に居れば、ちゃんとした器うつわで食事が取れたものを、謀反人の旅路では椎の葉に飯が包まれて出てくるよ。」

妻に宛てた歌ですが、当時は、妻もまた旅先の夫を思っ不安を抑えるために祈る習いがあったと思います。

西行もまた、今の福島県飯坂の旅路から、向こうに望む左波子温泉さわこをじつ見つめ、そこで別れた女むすめを思っているのです。さて、その返歌は、

「みちのくの寂しい旅路なのでしょう？ 宿やどにも泊まれず食事は椎の葉にご飯を包んで食べているのかしら。あなたを思っ、その椎の葉のように、あなたを包んで一緒に寝てあげるよ。」

と読んでみました。